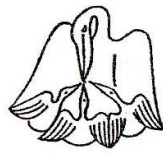




ハバクク（フィレンツェ・ドゥオーモ附属美術館）



阿佐ヶ谷教会

信友会 会報

6 月例会報告（2019 年 6 月 23 日開催）

聖書研究 ハバクク書

今年の夏も暑い日が続きましたが、信友会の皆様は何とか乗り切ることができましたでしょうか。ここ数年、夏の異常気象はじめ私たちを取り巻く環境の変化はいろいろな場面でみられますが、自然環境だけでなく政治や社会情勢の変化の大きさには戸惑いを覚えます。香港や台湾と中国本土、日韓の対立がこんなに大きな問題になろうとは。今回の聖書研究のハバククがこの時代をどう見るか預言を聞きたいものです。

(Y. O)

『預言者ハバクク』

古屋治雄牧師

預言者ハバククは、南ユダ王国存亡の時代に預言者として立てられています。

年表では、ハバククの活動はヨシヤ王の死後の紀元前 609 年からエホヤキム王の時代の第 1 次バビロン捕囚の紀元前 598 年の頃です。預言者エレミヤと重なる時代です。

ハバクク書は 3 章で構成される小さな預言書ですが、この預言書から 1 か所のみ新約聖書にとって大切な部分で引用されています。ローマの信徒への手紙 1 章 17 節「福音には神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。『正しい者は信仰によって生きる』と書いてある通りです」。ロマ書の最大のテーマである「福音による神の義」が、ハバクク書第 2 章 4 節の「見よ、高慢なる者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる」。ハバククの嘆きの声への神の答えの部分で引用されているのです。

ハバククの名前の意味は、アッカド語などから「バジルの木」があるが聖書的な意味合いを持っていません。ハバクク書には時代背景を示す序文、預言者としての出自や預言者としての召命を示す記述がありません。この理由は、この預言書がハバクク自身によって書かれたことに由来すると思われ、ハバククが敢えて書かなかったと思われます。この短い預言書ですが、全体に礼拝の式文的な形態を持っており、また、3 章に賛美の歌が重要な部分を占めております。このことからハバククは祭司の一人であったと思われます。

ハバククの活躍の時代

ハバククが預言者として活動した時代は、南ユダ王国が滅亡に向かっている時でした。ヨシヤ王が善政をなした 30 年間に、世界の政治的覇権は大きく変わり、メソポタミアで全盛を誇ったアッシリア王国が、新興のバビロニア王国に攻め立てられていました。南ユダ王国はバビロニアと同盟していました。アッシリアはエジプト王国と同盟しており、南ユダ王国は、609 年に北進してきたエジプトのネコ王の軍を阻止する戦いの中でヨシヤ王は戦死し、南ユダ王国はエジプトの支配下に入ります。南ユダ王国の王はエジプト王が任命する時代になったのです。メソポタミアでは、紀元前 612 年に首都ニネベが陥落してアッシリア王国は滅亡し、605 年



にバビロニアとエジプトはカルケミシュの戦いでエジプトが敗北してエジプトへ戻り、中東全域での覇権はアッシリア王国からバビロニア王国に移行しました。ここから、南ユダ王国は滅亡へと向かうのです。

ハバクク書の構成は、礼拝式文のようなものになっており、嘆き―主の答え―嘆き―主の答え―賛美 になっています。第1次バビロン捕囚の悲劇のただ中での預言です。この時代エレミヤと重なっています。エレミヤは腐敗の中にある南ユダ王国に神の器としてバビロニアを立てて裁きを行われることを告げ、ヤーウェ神へ立ち帰ることと神への悔い改めが強調しています。しかしハバククはユダ王国の罪は認めつつ、そうは言ってもなぜ救ってくれないかと嘆きの言葉を発し神の救いを懇願しているのです。同じ状況の中でも預言者によって預言の内容は一樣ではないのです。

ハバクク書第1章2節から4節は、紀元前598年の第1次バビロン捕囚の現実です。2節「主よ、私が助けを求めて叫んでいるのに いつまで、あなたは聞いてくださらないのか。わたしが、あなたに「不法」と訴えているのにあなたは助けてくださらない」。4節「律法は無力となり正義はいつまでも示されない。神に逆らうものが正しい人を取り囲む。たとえ、正義が示されても曲げられてしまう」。

神の応答

5節から11節は神の答えです。「諸国を見渡し、目を留め 大いに驚くがよい、お前たちの時代に一つのことが行われる。それを告げられても、お前たちは信じまい。6節「見よ、わたしはカルデア人を起こす。それは冷酷で剽悍な国民。地上の広い領域に軍を進め 自分のものでない領土を占領する。彼らは恐ろしくすさまじい。彼らから、裁きと支配が出る。」カルデアはバビロニアの地方名であり、神は南ユダ王国を懲らしめる器として獰猛なバビロニアを立てるというのです。獰猛で無慈悲な征服の民を用いるのです。11節では、「彼らは風のように来て、過ぎ去る。しかし、彼らは罪に定められる。自分の力を神としたからだ」。神の器と言っても自分の力を神としたゆえに罪に定められると言うのです。

12節から預言者の嘆きが書かれます。「主よ、あなたは我々を裁くために彼らを備えられた。岩なる神よ、あなたは我々を懲らしめるために彼らを立てられた」。ここで神の器としてのバビロニアを認め、13節には、「それなのになぜ、欺く者に目を留めながら黙っておられるのですか。神に逆らう者が、自分より正しい者を呑み込んでいるのに」。神の裁きは受け止めざるを得ないと思っていますが、バビロニアの暴虐に対して、17節で「だからと言って、彼らは絶えず容赦なく諸国民を殺すために剣を抜いてもよいのでしょうか」。ハバククは、自分たちの罪を認めつつも、懸命に、神によって建てられた王国に対して無残に剣を抜いて良いのかと食い下がっています。

2章始めから20節までに神の答えがあります。ハバククは神の答えを聞くために砦の塔に上ります。神の

答えは 2 節「幻を書き記せ、走りながらでも読めるように板の上にはっきりと記せ」。3 節「定められた時のためにもうひとつの幻があるからだ。それは終わりの時に向かって急ぐ。たとえ、遅くなっても、待っておれ。それは必ず来る、遅れることはない」。

ここでは、イスラエルの神の希望が示され、簡単に答えがあるわけではないが救いは必ず到来すること、根気よく待てと言っています。そして終末論的な希望をも示しています。

そして、2 章 4 節に、「見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる」。神は、第 1 次バビロンの捕囚の厳しい状況の中で、正しい信仰を持つ者への救いを約束しております。ハバククが神との応答の中から「正しい信仰によって生きる」という結論を得たことをパウロが読み取り、ロマ書 1 章 17 節に引用したと思われます。

賛美の歌

第 3 章は、ハバククの祈りです。聖歌隊が歌う賛美のように歌い上げています。

2 節では、「主よ、あなたの名声をわたしは聞きました。主よ、あなたの御業に畏れを抱きます。数年のうちにも、生き返らせ数年のうちにも、それを示してください。怒りのうちにも、憐れみを忘れないでください」。神の怒りを思いつつも憐れみを願っています。

13 節では、「あなたは、ご自分の民を救い、油注がれた者を救うために出て行かれた。あなたは神に逆らう者の家の屋根を砕き基から頂に至るまでむきだしにされた」。油注がれたものは、イスラエルの王を指します。王を救うために出て行かれたと感謝しています。

3 章 18 節で、「しかしわたしは主によって喜びわが救いの神のゆえに踊る。」と締めくくっています。

神の民の歴史と世界の歴史

ハバククの預言の前提には、世界の歴史、すなわち南ユダ王国がバビロニアのネブカドネツアル王によって滅ぼされ、多くの民のバビロンへの捕囚があったという現実の歴史があります。ここで、ハバククの預言に見られる世界観と歴史観について見なければなりません。

神の民の歴史は、世界を支配する神の歴史の中で位置づけられます。神の民の歴史は世界史の中にあるのです。神の歴史と世界史の関係をみると、一つは、神の民は、神に背くとき世界の歴史を通して神の審判を受けます。また、神の民は世界の歴史の中で神の民として終末論的希望の中に保持されるのです。2 章 2～3 節にあるように神の終わりに向かっての約束を待ち望む希望です。神の民の歴史を聖書に聞きながら世界の歴史を神が用いて神の歴史を進めていることに目を向けたいものです。

別の表現を用いると、世界は、神と無関係ではなく、積極的に神の歴史に参加させられています。また、世界は、神の民と同様に、神に背く時に神の審判を受けるのです。バビロニアのように神の裁きの器として用いられても度を越したときは神の裁きを受けなければならないのです。神の民の歴史と世界の歴史は深い相互関係の中にあるのです。

ハバククは、イスラエルが裁きを受ける器であることを認識しつつ、どうしてと神に食い下がる預言者として、神は立てられたのです。また、現代的には、神と世界の歴史の相関関係の中で、教会はどういう役割を与えられているかを考える良い機会です。

(文責：玉澤武之)

